
世界で一番嫌いな彼氏 1

如月綺華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番嫌いな彼氏

1

【NZコード】

N4601A

【作者名】

如月綺華

【あらすじ】

リストラにあり、某大型企業社員から一気に無職へと人生真っさかさまな冬華。そんな冬華が最悪な日に出逢ったのは、痴漢撃退してくれた大人っぽい雰囲気の人だったのだが、その正体は……。やギヤグな純愛（？）。

第一話 最悪な日

あたしがこの世で最も嫌いなもの
リでも、ましてや鼠でもない。

それは、蜘蛛でも、ゴキブ

それは、あたしの現彼氏、魅月晴。

そんなあたしと、大っ嫌いなアイツとなぜあたしが付き合わなくち
やならなくなつたのか……。

それは、あの暑い夏の初めの出来事から始まつた。

* * *

はあ、間に合つた。

あたしが、安心して胸を撫で下ろしたのと同時に背後でふしづつ
いう音がした。そして、電車の重いドアがホームからその空間を切
り離す。

完全にドアが閉まつてほとんど間もなく、電車がせわしなく動きだした。

はあ、なんとか間に合つたはいいものの、この寿司詰め状態。勘弁してよ。こっちから朝からこんな真暑い中走つて来たつてのに……。

あたし、江藤冬華は最近就職口をなくした、所謂リストラの被害者の一人つてやつ。

それが、今日新たな仕事の面接だつてのこ、こんな日に限つて、寝坊……。

身だしなみをチェックする時間なんてなく、ギリギリセーフでこの電車に駆け込み電車。

ま、この分だつたら、ちゃんと整えたといひでもみくちやにそれでただろうから、大した違はないだろうけど。

……それでも、さつきからなんか、目の前にいるサラリーマン風の男の体が、必要以上に胸に押しつけられてる気がしてたまらないんだけど　　混んでるし、やっぱ気のせいかな。

だけど、これが大間違い。

この変態リーマン、こっちが黙つてるのをいいことに、手をあたし

の後ろに回してお尻を触つてきやがつた。
これは、間違いなく……痴漢。

ちくしょー、普段こんな混んでる電車なんか乗らないからなあ。前の会社じや、出勤はバスだつたし。こんなことなら、こないだ買つた雑誌の痴漢撃退法のページよく読んでおくんだつた……。

そんなことを考えていると、あたしが恐くて動けなくなつていふと思つて付け上がつたのか、その手はだんだん下に下がつてくる。

[冗談じゃない。本気でピンチだ。

肘鉄を食らわしてやるつても、身動きができない。

そのときだつた。

「痛つ」

突然、あたしのお尻から手が離れていった。

な、何？！何が起つたの？

あたしは、その痴漢男の方に視線を向けると、奴の顔はひどく何か

に耐えているかのように歪んでいる。

ふと足元を見た。それでやつと合点がいった。痴漢男のその黒い革靴の上から思いつきり、まだ新しそうなスニーカーが踏み付けていたのだ。

そのスニーカーからどんどん上に視線を巡らせて見ると、隣にいたぱつと見大人っぽい雰囲気を漂わせた男性と目が合つた。すると、その瞬間、彼は外見とは似つかない、人懐っこいような笑みを浮かべこちらに向かってにこっと微笑んだ。

あたしは、この時、この笑顔にくらつときた。

そう、この時、は。

電車到着のブザーが鳴り、ドアが開くと同時に人がまるで栓を抜いた湯槽のお湯のように次々と電車の外へと押し流されていく。

あたしは、その人込みの中からさつきの人を捜し出そうと必死で目を懲らした。だが、どれだけ見渡しても人だらけのホームでたその内の一人を見付け出すことはできなかつた。

あんなかつこいい人に助けてもらえるなんて。

今日は朝から最悪だつたけど、さつきの笑顔だけでなぜかそんな嫌な気分が吹つ飛んだ。

お礼言えなかつたなあ。

まあ、あつひはあたしの」となんか覚えてないだろ?から、いつか。

あたしはふと腕に巻きつゝ皮製のベルトにつけ、1から12までの数字を刻む平盤を見た。

「やばい

時計はもう九時を指していた。面接の時間まで、あと半時もない。せっかく朝から走ってきた意味がなくなつては困ると、急いで駅から賑わいだした街へと踏み出していく。

う。

なあにが、「君、定職に向かないんじゃない?」だよ。自分の意見を精一杯アピールした結果が、これだ。

まあ、確かに、面接官の間違いを指摘したのが悪かったけど

「やつと上回りつまくやつてけないでしょ?」

・・・そんなこと無かつたけど。いや、そんなことあつたから、会社のリストラリストに載たんだつけ。結局うまくやれてると思って

たのはあたしだけだつたかも。

そんなこんなで、今日の面接、きつと落選決定。通知が来る必要も無く、馬鹿でもわかる。

はあ、朝から痴漢に遭うわ、面接は最悪だわ、やつぱり今日はツイでない。友達の皐月から飲もうメールきてたけど、ついてない日は、家にじつとしてるのが一番。皐月には悪いけど、断りのメールを電車の中で打つ。

しかし、ケータイをポケットにしまったとたん急激な眠気に襲われた。

まだまだ、降りる駅まであるし、少しくらいいつか。

そう思つたあたし、瞼の重みには逆らわず、ゆっくりと穏やかな眠りへと落ちていつた。

第一話 見つけられた小さな”冬”

誰かさんが誰かさんが

誰かさんが見つけた

小さい秋 小さい秋

小さい秋 見つけた

ねえ、小さい冬を見つけてくれるのは誰ですか？

はつ。

田を覚ました時にはもう遅かった。

『次は終点へ、次は終点へ』

嘘つ。あたしが降りるはずの駅は確か、終点よりも乗った駅からの方が近かつたはずだ。

またやつた。

ほんとに今日は最悪な一日。家にすら帰れない。

とつあえず、終点で電車から降りる。夏の夜の涼しい風が肌を撫でる。

ふと顔を上げてみた。

あたしは、思わず絶句。駅の周りは真っ暗。かろうじて、出口から続く細い道を微かな外灯が照らしているだけだ。

あたし、どこまで来たの? さつきまで、外はまだ明るかったはず…

退屈そうに乗車客の切符を集めている駅員に近寄つたあたしは、手に持つた切符は渡さず、思い切つて尋ねてみた。

「あの、次の電車つて……」

それを聞いた駅員は面倒くさがりついで、口を開いた。

「次？ 次は、明日になるまでありませんが

ありえない。

やっぱ、今日は最悪。

これからどうしよう。こんな田舎じや、ビジネスホテルなんかもありそうにないし。

あたしはとりあえず、駅のホームから出た。だって、明日まで使われないのに居たつてしまふがいいもの。

どうしようか迷つていると、一台の車が駅の前に立ち止むあたしの眼前を走つていった。

へえ、こんな細いことに車通れるんだ。

なぜか感心してしまつたあたしの目の前で、その車はブレーキを踏んで停車した。

どんな人が乗つているか少し気になつたあたしは、横田にその車のドアが開き中から人が出でてくるのを盗み見た。

「あつ」

そこから出てきたのは、朝の電車で痴漢を撃退してくれた、あの人だつた。

「ん？ なに人見て変な声だしてんの？……江藤冬華さん」

それを聞いた瞬間、あたしは目から目玉が落ちるかと思つべから驚いた。

「な、なんで？」

驚きすぎて、それ以上言葉が続けられない。だけど、その後に続く言葉を察したのか、彼が言う。

「だつて、待つてたんだもん。……最初あなたの降りる駅で待つてたのに、降りてこないから。ホントは、俺が駅から出でてくる冬華さんをかつこよくお出迎えへなはずだつたのに」

顔の印象とはまったく異なる軽い話方をするこの男を記憶を引っ張り出して脳内検索にかけたが、一つも該当するものとして弾き出されたものはなかつた。

もしかして、これが世に言う、ストーカーさん？

「あたし、あなたみたいな人知りませんっ」

思いつきつて、冷たく言ったあたしに、彼の見せた反応は意外でしかなかつた。

「知るわけ無いじゃん。初対面だもん、今日の朝で」

はあ？

思わず口が開け放しになつたまま、彼を見つめた。

「まさか、ターゲットが朝助けた美人さんだったなんてね。俺だって思いもしなかつたし」

まったく話が読めないんですが……。

「え？ だつて、あの大企業に勤めてるんでしょ？ 露月姉からそう聞いたんだけど」

さあ～つ～き～？

親友の名前が出た瞬間、あたしは露月に殺意さえ覚えた。この、面倒くさいのを押し付けた張本人て訳だ。

きっと、今日飲みに行つてたら、こいつが乱入して来たに違いない。

「キャリアウーマンで、こんな美人なら言つことなしだし……決めたつと」

一人でぶつぶつぶやいていた男は、突然顔を上げると、子供のように輝かした笑顔をあたしに向けると、こいつ言つたのよ。

「冬華さん、今から俺の彼女ね」

小さい”冬”が見つかったのは、他でもない、この魅月晴と言いつてつもなく変な奴だった。

第三話 向でいるなんの？

「ちよっと、皐月いーじゅこいつ」と。

朝一番にかけた文句の電話の向こうに、思いつきり心のひきを吐き出した。

「ええ～？ だつて、あんたこいつまでたつても彼氏作らないじゃないの。……まあ、あいつのこと忘れられないのは分かるけどさ」

「あいつ……。あたしの元彼のこと言つてるのは分かってる。別に忘れないたつていいじゃない。だが、まわりはどうもなつか思つてくれないらしい。」

「でも、晴はなかなかいい奴だからさ。変だけど。あ、あいつには冬華が会社辞めたこと言つてないから。じゃ」

がちゃ。つーつー。

一方的に切られた。

仕方なく、耳から電話器をはずしたとき、台所から声がした。

「朝つてご飯派？ それともパン？」

「いらっしゃるに半分身体を乗り出して居たのは、他でもない、皐月晴。

「ていうか、君、いつまでここに居るの？」

あたしの口からほため息。

「いいじやん。送つてきてあげたんだし」

そりゃあせうだなご。

「つてこつか、冬華をもつてほんと往生際悪こよな」

「こつが言つてのは、昨日の出来事のこと。

* * *

「絶つて対、い・や

「いいじやん、減るもんじやないし」

「いや、減る。あたしの平和な日常が」

「せつかく送つてつてあげるつて言つてゐるのよ。家教えてくれなき

や、送つてけないじやん。それに、彼女の家を知つてるのは当然だと思つんだけど。後、合鍵も「

あたしはそんなことしたら終わりだと思つた。

「あたしはあなたの彼女じやありませんし……あたしの家をあなたになんか教えたら、何されるかわからんいでしょ」

「何つて？毎日通うだけだけど」

それが一番恐ろしいんだって。

「じゃあ、どこ行くの？俺んち？」

「誰が行くかっ！」

あたしがほほ怒鳴るように言つたら、晴は、少し悲しそうに俯いた。なんだか、あたしが悪いことしたみたい。

「う、と、とにかく、あなただけでも、家、帰つてください。あたしは自分で何とかする。明日、会社とかあるんじやない？」

「あー、まあ、一日くらいいいじやん。まだ入社一年目だし。職場の人たち、俺に甘いし」

ちよつと待つて。入社一年目つて、こいつあたしより…………年下？！

「君、いくつ？」

「21だけど？」

うつわ、あたしより4つも年下……。」の、ふけ顔め。てつきり年上だと思つてたのに。

「じゃあ、冬華さんが決めないんなら、俺が決める。早く、車に乗つて。ほら、早く」

「ちょっと、押さないでよ。もう

あたしを強い力で車に無理やりと言つていい感じで押し込む。はたから見たら、誘拐現場。幸か不幸か近くには誰も居なかつたが。

あたしを助手席に荷物のよひこ詰め込み終わると、彼は、車の前をまわつて、運転席のドアを開けた。

「どうしての？」

隣のエンジンをかける男にむかむか尋ねた。

「楽しことーー

は？

バカみたいに口を開けたままのあたしに、彼は初めて会つたときと同じ、あのさわやか笑顔を向けた。

「それと、俺、”あなた”でも”君”でもないから。魅月晴。み・つ・き・は・る。分かつた？」

だが、そのときの笑顔は初めみたよひには素敵に思えず、寧ろ悪魔

の笑みに見えたのだつた。

「ぐう~

「きく~」

「やっぱ、夏のビールはいいねえ。これで、花火がパーンて上がれば最高なんだけどなあ」

「冬華さん、なかなか風流なこというね。おひちやあん、もう一杯追加あ」

そう、いじめ、どこにでもある居酒屋。

「まだ、飲むんですか？お一人さん」

カウンターの向こうから、怖そうな顔の居酒屋の店主が似合わないにこやかな笑みで話しかけてきた。

「まだまだ行くよ～。朝まで飲み明かすもんねえ、ね、冬華さん」

「もつちらんっ！」

氣前よく返事するあたし。

今思えば、ただのバカ。やめとけばよかつたと後から思つても、もう遅い。

騒ぎまくつて、晴相手にたくさん愚痴つたのは、恥ずかしながら覚えてる。

それからしだいにはつきりしなくなる記憶のどぎれどぎれにて、あいつのと、居酒屋のおじさんの顔とが浮かんでは消えていく。

次に、頭がしつかりしたときには自分の家のベットの上だった。

少しだけ首を横に動かして、一瞬見覚えのないものが視界に飛び込んできた。目が冴えてきたとたん、それが、人の顔だとわかる。

そして、あたしの本日第一声は、外を散歩してた猫が塀のうえから

おひるねへひらくの準備。

で、今戻るわけだ。

「ほんとにああ、酔つ払つてゐる癖に、なかなか自分ち言わないんだ
かい。『あたしの日々がストーカー対策で埋まっちゃう』だの叫んで
さあ。どうせ教えるんならあんな喚いてる前にやれと教えれば
いいのに」

あたしに引っ搔かれた傷に少し痛そうに触れながらすねた子供みた
いな表情。

また、あたしは悪くないのにちょっと罪悪感が胸を過る。

「って、あんた、これが狙いだつたでしようつ

あたしはこいつのあくどいやつ方を思ひ出しへ罪悪感を振り払い、
水を得た魚のように反撃した。

「しかも、この状況、めちゃくちゃ事後」

はあ、と今日、何回目かわからぬ深いため息をついた。

逢つたばかりの男とその日になんて

ほんとに取り返しがつかない。そう思い出すと思わず視界が滲んだ。
そんなあたしを知つてか知らずか黙つて明後日の方を向いたままゆ
つぐアバロをふかす。

そんないつにだんだん腹が立ってきた。
大体、こいつの所為じゃない。

「もう、いい加減早く帰つてつ」

その声に飛び上がる晴。

「何、急に」

涙声いで叫びながら晴の背中を玄関のほうへ押す。

「もう一度」とはない。今度あたしの前に現れたら……」

その台詞とともに奴の鼻の先でドアを思いつきり閉めた。

ちょっとやりすぎたかな。いや、と一人になつた部屋であたしは首を振つた。あいつが悪いのに、何で同情してゐんだろ。

今日は気分転換にカラオケでも行くかな。

あたしは、携帯電話を開いて、ダイヤルを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4601a/>

世界で一番嫌いな彼氏 1

2010年10月11日18時48分発行